

巻頭言

ジェイ・シンポジウム報告

2018年3月28日、立命館大学 衣笠キャンパス 末川記念会館講義室にて、間文化現象学シンポジウム『『うつむく眼』と間文化性——21世紀における視覚の行方』が開催された。このシンポジウムは、思想史家の大家マーティン・ジェイ氏（カリフォルニア大学バークレー校教授）の著書『うつむく眼——二〇世紀フランス思想における視覚の失墜』（原著1993年）の日本語訳（亀井大輔・神田大輔・青柳雅文・佐藤勇一・小林琢自・田邊正俊訳、法政大学出版局、2017年）が刊行されたことを記念して企画されたものである。

マーティン・ジェイ氏は世界的に著名な思想史家であり、わが国でも『弁証法的想像力』『マルクス主義と全体性』『アドルノ』など多くの翻訳によってよく知られている。『うつむく眼』は、古代ギリシアから現代フランスにいたるヨーロッパ思想のなかでの視覚の変遷を描き出した大著であり、日本語訳も久しく待望されていた。このたび、原著の登場から二五年を経て日本語訳が刊行されたことを記念して、訳者全員がメンバーとして所属する間文化現象学研究センターがジェイ氏を囲むシンポジウムを企画したのである。

実は、ジェイ氏の立命館大学での講演はこれが3回目となる。1回目は2005年、暴力論研究会第5回講演会として「恩寵の場にあらず—庭園にある暴力—」という講演が行なわれた。この講演を聴講したことが、訳者たちが『うつむく眼』を翻訳したいという意向を持った直接のきっかけである。続いて2回目は2012年、回復研究会の主催により「“反”啓蒙の弁証法——過激派のスケープゴートにされたフランクフルト学派」と題した講演である。ちょうどそのタイミングで『うつむく眼』の翻訳担当が決まったので、そのことをジェイ氏に直接お伝えする機会となった。このように氏の立命館来訪は『うつむく眼』の翻訳の経緯と重なっている。今回の刊行を機に、3度目の来

訪の依頼を快く受け入れていただいたことに対し、ジェイ氏に心より感謝したい。

当日は、加國尚志教授による挨拶の後、ワークショップ「マーティン・ジェイの思想史を起点として」が開かれた。そこでは訳者6名が2つのセッション（1「視覚と思想史」、2「哲学と反視覚」）に分かれて、ジェイ氏の思想史の仕事を参考にしつつ自らの研究テーマについての発表を行なった。各セッションの討議では、ジェイ氏からもそれぞれの発表に対するコメントをいただいた。続いて、ジェイ氏の講演「融合する地平？ 日本における『うつむく眼』」が行なわれた。講演は『うつむく眼』の続編もしくは特別編ともいうべき、日本文化における視覚の問題に果敢に取り組んだものであり、講演後の質疑応答では多くの質問に対し真摯な回答がなされた。最後に谷徹教授・センター長による挨拶によって会は締めくくられた。

本誌に収録するのは、当日のジェイ氏の講演原稿（英語・日本語訳）およびワークショップ発表にもとづく論考（英語・日本語）である。当日の記録を両言語で掲載することを許可していただいたことに感謝したい。ジェイ氏の著書の翻訳刊行とこのシンポジウムを通じて、私たち間文化現象学センターのメンバーが得たものは非常に大きいものであり、今後の研究活動にとって貴重な糧となることを確信している。

立命館大学文学部・准教授

亀井 大輔